第３　問題作成部会の見解

１　出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

○　高大接続改革の中で，高等学校学習指導要領の趣旨を踏まえ，各大学の個別選抜や総合型選抜等を含む大学入学者選抜全体において，「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の総合的な英語力を評価することが求められている。共通テスト「外国語（英語）」は，「リーディング」形式と「リスニング」形式の問題を通して，文字や音声による試験の特徴を生かしながら，以下のように可能な限り総合的な英語力を評価する。

・コミュニケーションを行う目的や場面，状況などに応じて，情報や考えなどの概要や要点，詳細，話し手や書き手の意図などを的確に理解する力を引き続き重視する。

・併せて，高等学校において，英語を「聞くこと」・「読むこと」・「話すこと［やり取り］，［発表］」・「書くこと」を統合した言語活動の充実が図られることを踏まえ，情報や自分の考えを適切に表現したり伝え合ったりするために，理解した情報や考えを整理したり，何をどのように取り上げるかなどを判断したりする力を重視する。

・また，コミュニケーションを支える基盤となる音声や語彙，表現，文法等に関する知識や技能についても，上記の力を問うことを通して引き続き評価する。

○　「リーディング」，「リスニング」ともに，共通テストの問題のレベルは，出題範囲としている科目（「英語コミュニケーションⅠ」，「英語コミュニケーションⅡ」及び「論理・表現Ⅰ」）の目標及び内容（言語活動の例，言語の使用場面や働きの例など）等に対応したものとする。その際，多様な入学志願者の学力を適切に識別できるよう，引き続き，CEFR の概ね A1～B1 レベルを目安として問題のテクスト，使用する語彙，タスクなどを設定し，問題を作成することとする。

○　「リーディング」の表記については，現在国際的に広く使用されているアメリカ英語に加えて，場面設定によってイギリス英語を使用することもある。

○　「リスニング」の音声については，多様な話者による現代の標準的な英語を使用する。また，読み上げ回数については，１回読みと２回読みの両方の問題を含む構成で実施することとする。

２　各問題の出題意図と解答結果

・　第１問は，英語の特徴やきまりに関する知識・技能（特に文構造及び文法事項）に基づき，身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い発話を聞いて，必要な情報や，発話内容の概要や要点を把握する力を問う。日常的な内容の文を聞いて，内容が合っている選択肢（セクションＡでは文，セクションＢではイラスト）を選ぶ問題である。音声は２度流れる。

　第１問の正答率はおおむね狙いどおりであった。問４の正答率が低かったのは，発話で用いられた“wonder”が，誤答である④にのみ含まれていたことが理由として考えられる。問７の正答率も低かったが，これは“being pulled”が聞き取れなかった受験者が多かったためと考えられる。

・　第２問は，身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い対話を，場面の情報とイラストを参考にしながら聞き取ることを通じて，必要な情報を把握する力を問う。日常的な短い対話を聞いて，設問に対する答えをイラストから選ぶ問題である。音声は２度流れる。

　第２問の正答率はおおむね非常に高かった。文脈が与えられ，対話の中で必要な情報が順次分散された形で提示されていること，選択肢が絵であること，また音声が２度流れることが理由であると考えられる。特に問 10 の正答率が高かった。４つの絵を区別する３要素が体系的に提示されており，正答にたどり着きやすかったと考えられる。

・　第３問は，身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い対話を，場面の情報を参考にしながら聞き取ることを通じて，概要や要点を目的に応じて把握する力を問う。日常的な対話を聞いて，対話内容に関する設問の答えとなる選択肢を選ぶ問題である。対話は言語の機能（例：確認，依頼，誘い等）を軸に作られており，小問６題のうち，今回は問 15 と問 17 をイギリス英語による発音とした。また，この大問から音声は１度しか流れない。

第３問全体の正答率は，おおむね適切な範囲であった。その中でも問 17 は識別力が高く，良問であったと言えよう。問 14 は，タクシー料金とバス料金を比較する発話を正確に聞き取る必要があったため，１回聞いただけでは成績上位層にとっても難しかったかもしれない。逆に問 16 は後半のみの理解で正解にたどり着けるため，成績下位層にとっても容易であったと考えられる。

・　第４問Ａは，必要な情報を聞き取り，図表を完成させたり，分類や並べ替えをしたりすることを通じて，話し手の意図を把握する力を問う。また，第１問の文（２回読み）・第２問の対話（２回読み）・第３問の対話（１回読み）から，長めのモノローグに移行する設問としてのつなぎの役割を果たしている。

問 18～21 は，大学生の朝食の好みの経年変化に関する話を聞いて，図を完成させる問題であった。得点を得るには全問正解する必要があるため正答率は低めであったが，識別力が高く良問であったと言える。

問 22～25 は，旅行先の週間天気予報を聞いて，表を完成させる問題であった。得点は各問いに付与されるため正答率はおおむね高かったが，いずれの問いも識別力を示した点は評価できよう。

第４問Ｂは，複数の情報を聞き，最も条件に合う選択肢を１つ選ぶことを通じて，状況・条件に基づき比較して判断する力を問う。四人の話者は，アメリカ英語，カナダ英語，イギリス英語，日本語母語話者各一名であった。

サーフィンをする場所を決めるために，四人のサーファーによる異なるビーチについての話を聞き，考えている条件に最も合う場所を決めるというものであった。正答率は高く，この種の問題に関しては受験者の対策が整っているように感じられる。

・　第５問は，身近な話題や知識のある社会的な話題に関する講義を聞き，①メモを取ることを通じて概要や要点を捉える力，②聞き取った情報を他者と共有したり，話し合ったりする力，③聞き取った情報と問題文中に示されたグラフ資料を統合的に処理する力を問う。

トピックは“regifting”（誰かにもらった物を別の人に贈ること）で，その特性，並びに元の贈り主，“regift”する人，される人の感じ方に関する講義を聞く形式であった。難易度が高い大問であるが，問 27，32，33 に関しては，正答率は標準的な範囲にあり，十分な識別を得ていた。問 32 は新学習指導要領に基づき，特に上記の②に関わる新傾向の問題であったが，正答率，識別力とも想定された範囲であった。

一方，問 28～29 と問 30～31 の正答率においては，全体として低かった。

・　第６問Ａは，身近な話題やなじみのある社会的な話題に関する会話や議論を聞き，話者の発話の要点を選ぶことを通じて，必要な情報を把握する力や，それらの情報を統合して要点を整理し，判断する力を問う。

今回は食事における咀嚼（そしゃく）の効用について話し合う二人の会話を聞き，会話の趣旨を判断させた。正答率は標準的な範囲にあり，識別力も高かった。全体を通じて会話の内容を理解することなしに正答に至ることはまれであると考えられる。

第６問Ｂは，身近な話題やなじみのある社会的な話題に関する会話や議論を聞き，それぞれの話者の立場を理解し，さらに特定の話者の意見を支持する図表データを選ぶことを通じて，必要な情報を把握・統合し判断する力を問う。

野生の鳥にえさを与えることの是非を議論する三人の意見を聞き，話者の立場を判断させた。従来話者は四人であったが，人数減により一人分の発話量が増え，各話者の立場のより詳しい描写が可能になるため，今回は三人とした。また，これまでと同様，男女の声の違い，異なる種類の英語，話者が互いの名前を呼び合うことにより，登場人物が区別できるようにした。

問 36 は鳥にえさを与えるべきではないと思っている話者の人数を問うたが，正答率，識別力とも狙いどおりであった。昨年度は条件に合う話者の名前を問うたが，どちらの形式にも一長一短があり，作成された会話の特性に応じてどちらかの形式にすべきであると考える。

３　自己評価及び出題に対する反響・意見等についての見解

今回の共通テストは，平成 30 年告示の学習指導要領に基づく教育課程の下で実施される初めての試験であった。これを踏まえ，英語（リスニング）では，主に第５問を見直した。今年度は「状況」に加えて「活動１」～「活動３」が示され，講義を聞いてワークシートを完成させ（活動１），学生同士で講義内容を確認し（活動２），講義の内容に関わる図を基にした学生同士の会話を聞き，その内容と講義内容に関する問いに答える（活動３）形式であった。

この新傾向問題に関しては，高等学校教科担当教員からは，「段階的な学習活動の要素を取り入れた問題」，また，講義の内容及びグラフの読み取りなど「複数の資料を関連付けながら，その意味するところを考察する問題」であり，「総合的にものごとを捉える力が要求されていた」という評価を受けた。さらに，教育研究団体からは，「講義の内容を踏まえ，複数人の意見を聞き取り，図表を読み取り，選択肢の内容を読み取らなければならない。（中略）このような行為はまさに授業の前後で行われていることでもある。これまでの学校生活で得てきた経験の差が強く影響する設問であり，高等学校での授業の在り方等にも影響を与えうるという観点で良問という評価ができる」と称賛された。問題の内容形式及び高校英語教育への波及効果に関しておおむね良い評価が得られた。今後とも，方向性は維持した上で，第５問の更なる改良に努めたい。

本テスト全般について，教育研究団体からは，「様々な場面や状況を設定し，その中で知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問う内容となっており，また，外国語に関する様々な知識を実際のコミュニケーションにおいて，目的や場面，状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付ける，という学習指導要領における目標を反映した出題となっている」との評価を受けた。

また，高等学校教科担当教員からは，今回の共通テストは新学習指導要領に基づく初めての試験であったが，学習指導要領の「趣旨を踏まえて各問題が作成されている」との評価を受けた。具体的には「必要な情報を聞き取って答える知識・技能を問う問題に加え，まとまりのある内容の話を聞き取って，概要や要点を捉えるなど，思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる内容がバランス良く出題されている」と評価された。さらに，多様な話者による英語が使用されていることも「グローバル社会を見据えたリスニング試験である」と論評いただいた。

今後も，多様な英語の音声を用い，思考力・判断力・表現力等を必要とする，話者の意図，含意と文脈，内容理解を問うような問題，受験者が既存の知識や体験を集結させながら解く問題，身近な暮らしや社会に関わる題材で，日常生活で用いられる自然な英語を体現した問題の作成を続けていきたい。

一方で，出題に関して懸念される点も幾つか指摘を受けた。以下に主なものとそれに対する問題作成部会としての見解を述べる。

・　第４問Ｂ（複数の話を聞き，与えられた三条件に最も合うものを選ぶ問題）に関して，「話される英語はおおむね条件の順番に沿っているため，聞き取りやすいが，今後，話される条件の順番を変える等の工夫があっても良い」という指摘を受けた。これに限らず，良問作成のための工夫につ

いては検討を続け，取り組んでいきたい。

- 第５問の問 28～31 は「ワークシートと選択肢にある言い換えの語彙の理解がとっさには難しく」，難易度が非常に高かったという指摘を受けた。この点は今後の問題作成において意識していきたい。
- 第５問の問 33（講義，会話，グラフの内容を統合して判断する問題）に関して，「選択肢は２行にわたって比較的長い 20 語程度の英文で構成され，かつ限られた時間で講義と会話とグラフを統合して判断することが求められるなど，受験者への負荷はやや高かった」という指摘を受けた。この点は今後の検討課題としたい。

４　ま　と　め

本テストの平均点は 61.31 点であり，前年度と比べて 5.93 点低くなった。全体としてはやや難化したと言えよう。しかしながら，共通テストの出題形式に受験者が慣れてきたこと，受験者が４技能の学習を強化していること，小学校からの英語学習経験によりリスニング力が全体的に向上していることなどを考慮すると，平均点の上昇に歯止めが効かなくなる可能性がある。

一方で，教育研究団体からは，「昨年度までの平均点の上昇傾向を受け，難易度を上げる意図のもとになされた作問もあると思うが，飽くまでも「リスニング」の力を図る試験であることを念頭に置いた作問をお願いしたい。（中略）資料やデータの数を増やしたりすることにより，受験者の作業量を増やすような負荷のかけ方については，慎重な検討が求められる」という重要な指摘を受けた。難易度の調整に留意しつつ，認知的負荷の増加が識別力の低下をもたらさないよう努めたい。

本テストは，４技能のバランスを意識し，場面設定などを日本語で表記することで，測る力を「聞く力」に集約している。また，様々なコミュニケーションの場面や状況を設定し，学習指導要領の方針を汲んだものとした。英語の多様化についても一定程度体現化できたと考える。こうした方向性については，今後も継続していきたい。

共通テストの高等学校の授業への波及効果が大きいことは，上記の教育研究団体のコメントからも明らかである。高等学校において，生徒各自が，「読んだり，聞いたりしたことを基に自らの考えを述べたり，互いに意見を伝え合ったりするような豊かなコミュニケーション活動を通じ，主体的・対話的で深い学びを実現する指導を充実させたい」という高等学校教科担当教員の見解は，問題作成部会も共有するところである。

問題作成部会としては，共通テストが，「情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」の育成につながる波及効果があるものとなるよう，今後とも尽力していきたい。